

E 国 語 問 題

注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべて黒鉛筆または黒芯のシャープペンシルで記入することになっています。黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷ついたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のように黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しきらずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
○ 1
○ 2
● 3
○ 4
○ 5

(3と解答する場合)

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答题紙に書くこと)

ナショナリズムは、常にとはいえないまでもしばしば各種の紛争のもととなりがちであり、そのことがこの主題について考える際の「トゲ」のようなものであり続けた。そこで、やや抽象論になるが、ナショナリズムと紛争の関係について多少一般的に考えてみたい。

抽象的にいえば、何らかの集団——その集団をどのように定義し、そこに含まれる「自分たち」と「他者」とをどのように分けるかは多様だが——への帰属感情というものは、「仲間」「身内」の親近感や結束を高めるものである以上、控えめにいっても「他者」とのあいだに一定の「区別」意識をもたらずのは避けがたい。そして、その「区別」意識がさらに「差別」ないし排除へと転化するのは——必然とまでいえるかは議論の余地があるにしても——ありがちなことである。他面、人間というものが周囲の人々から切り離された純粹の個人とか抽象的な「普遍的人間」一般として生きることができない以上、集団帰属感情というものを全面的に否定することもできない。では、どうしたらよいのか。

一口に対立とか紛争といっても、比較的ささやかで無邪気なレベルのものから、極度に強烈で大規模な暴力を伴うものまである。とすれば、素朴に考えるなら、前者は否定するに及ばないが、後者は否定すべきだということになりそうである。もともと、最初は比較的小規模だった紛争がいつのまにか大規模なものに転化してしまうことがある以上、これらの差異は連続的であり、どこかに明確な一線が引けるとは限らない。

(注1) 各地の民族紛争についてよく指摘されるのは、ある時期まで平和的・友好的に共存していた諸民族・エスニシティが、あるとき突然激しい対立に陥ったということである。もともと、細かく見るなら、友好的共存が支配的だった時期においても個別的な対立・紛争などはあっただろうが、それは比較的低いレベルにとどまっていたのが、いくつかの条件の重なりの中で、驚くほど激しいレベルにまで高まったということだろう。問題なのは、あるときまで潜在的だったり、穏和だったりした紛争が顕在化し、次第にエスカレートし、ついには

大規模な暴力に至るメカニズムはどのようなものか、それを予防するにはどうしたらよいのかという点にある。

「身内」と「他者」の区別は、それだけで紛争をもたらすとは限らないが、資源の稀少性——経済的富であれ、政治権力であれ、社会的名譽感情その他であれ——と結びつくとき、紛争に導きやすい。もつとも、稀少性という事実自体は至る所にあるもので、そのすべてが深刻な性格を帯びるわけではないが、ある局面でそれが特に強まる——あるいは、強まるだろうと予期される——とき、稀少資源をめぐる紛争が激化する。そうした紛争の中で、「われわれ集団」の連帯意識が利用され、紛争が「われわれ」対「彼ら」という形をとるなら、そのことによつて集団間の対抗感情が強められる。また、ある集団内の個人がそれまではそれほど強い一体感をもっていなかったとしても、紛争の過程で「身内」としての一体感を強めることになる。

この場合、紛争に動員される連帯感情がどういう性格のものであるかは多種多様であり、特定のタイプの「身内」意識が特に紛争を激化させるといことが、あらかじめ決まっているわけではない。しかし、ともかく何らかの「身内」意識・親近感・連帯感情がある程度存在し、それが紛争の過程で利用されることによつて、よりいっそう強烈なものへと煽り立てられていく。こう考えるなら、事前にあつたそうした感情は、それ自体として紛争の決定要因であるわけではないが、いったん動員され、煽り立てられると、一種の自己運動を起こし、收拾が非常に困難になる。問題は、そのような感情の動員と紛争のエスカレートがどのようにして起きるかにある。

どういふ条件下で紛争が起き、また拡大するかについては、これまでに種々の研究が積み重ねられているが、何らかの明快な法則性のようなものが打ち立てられているようには見えない。経済的要因を強調するもの、文化的差異を重視するもの、またエリート重視の理論と大衆心理重視の理論などがあるが、どれも全面的な説明にはなっていない。エスニック紛争研究で有名なホロヴィッツ^(注2)は、既存のさまざまな理論の一面性を批判した上で、アジア・アフリカ・カリブ諸国の研究から、ある国の中の後進的な地域、またそこにおける後進的な集団ほど分離運動に走りやすいと結論した。この研究は既存の議論の限界の指摘では鋭く、またある一定範囲では妥当な観察であるかにみえる。しかし、旧ソ連・旧ユーゴスラヴィアの解体過程で起きた一連の紛争の場合、ホロヴィッツ

ツの定式はまったく当てはまらず、むしろ逆の傾向さえ観察される（相対的に富裕な地域ほど分離運動が強かった。もつとも、一旦起きた紛争の強度はこれと対応しない）。一般理論構築の困難性を改めて痛感させられる。

暴力的な衝突およびそのエスカレートを避けるためには、何が必要だろうか。この点に関して、「寛容」開放性「相互理解」等の精神が重要だということは古くから言い尽くされてきた。これらの言葉は紛争のエスカレートを防ぐ [] な態度を象徴するとされ、「不寛容」「閉鎖的」「排他的」等の言葉は、逆に紛争エスカレートに通じる危険な態度だとされる。

そのこと自体は一般論的にいえばそのとおりであり、とりたてて異を唱えるべきことではない。だが、具体的な個々のケースにおいて、どの勢力が「寛容」で、どの勢力が「不寛容」かを判定するのは、容易とは限らない。⁽⁵⁾ 国際社会の眼を意識する当事者たちは、しばしば自分たちの方が寛容だということを言葉の上で強調し、相手方が排他的・侵略的態度をとっているためによむを得ず防衛措置に追い込まれたのだと説明する。現代社会において露骨に「領土拡張」「余所者排斥」「民族浄化」等々を自ら掲げる政治勢力は稀であり、これらの言葉はむしろ外から貼られた政治的レッテルとして機能することが多い。そして、「不寛容で排他的な敵」による攻撃から自らを守るためという意識に基づいた行動——主観的には対抗的・防衛的措置だが、相手方から見れば一方的攻勢と受け取られる——が紛争を悪循環的にエスカレートさせることが珍しくない。

こういう状況を前にしたとき、外部の観察者がどのような判定を下し、どのように介入するかも微妙な問題となる。「あの勢力は寛容で開放的な態度をとっている」「あの勢力は不寛容で排他的な態度をとっている」という評価は、往々にして安易なレッテル貼り——前者を善玉、後者を悪玉とする一方的な決めつけ——と化すことがある、それは現実の紛争解決に役立たないばかりか、一方の側への偏った応援にしかならない。一つの例として、一九八〇年代以降長期にわたって続いているアルメニア―アゼルバイジャン紛争に關し、現代欧米の知性を代表する大知識人たち——ハーバマス、^(注4) デリダ、^(注5) レヴィナス、^(注6) バーリン、^(注7) ローティその他多数——が一九九〇年に出した共同声明は、その意図にかかわらず、アゼルバイジャンのみを一方的な「悪玉」とすることで、かえ

つて紛争の激化に貢献する効果しかもたなかった。こうした事例は、紛争への関与がいかに難しいものであるかを痛感させる。いわゆる「人道的介入」をめぐる一連の議論も、これと同種の問題に関わっている。

(塩川伸明『民族とネイション——ナショナリズムという難問』による)

(注) 1 エスニシティ——血縁ないし先祖、言語、宗教、生活習慣、文化などを共有し、それによって自分達とそうでない者達とを区別する意識を有する集団。

- 2 ホロヴィッツ——ドナルド・L・ホロヴィッツ。米国の法学・政治学者(一九三九)。
- 3 アルメニアアゼルバイジャン紛争——アゼルバイジャン領内にありながらアルメニア系住民が多数であったナゴルノ・カラバフ地方の領有をめぐるアルメニアとアゼルバイジャンとの紛争。両勢力の軍事衝突により、多くの民間人が死傷した。
- 4 ハーバマス——ユルゲン・ハーバマス。ドイツの哲学者、社会学者(一九二九)。
- 5 デリダ——ジャック・デリダ。フランスの哲学者(一九三〇～二〇〇四)。
- 6 レヴィナス——エマニュエル・レヴィナス。フランスの哲学者(一九〇六～一九九五)。
- 7 バーリン——アイザイア・バーリン。イギリスの政治学者(一九〇九～一九九七)。
- 8 ローティ——リチャード・ローティ。米国の哲学者(一九三一～二〇〇七)。

問

(A) ——線部(1)とは、どのようなことか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 個人としての特徴を有しない無個性な存在として生きること。
- 2 他者とのあらゆる関係を断った自立した存在として生きること。
- 3 特定の集団への帰属や区別意識から自由な存在として生きること。

- 4 地球規模の全人類的な社会への帰属意識を持つ存在として生きること。
- 5 区別を差別に転化することなく他者と共存できる存在として生きること。

(B) —— 線部(2)について。ここでいう「資源」の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 人工的に作り出すことのできない貴重で高価なもの。
- 2 「身内」としての集団を維持していくのに必要なもの。
- 3 ありふれているながらも特定の人々にとっては重要なもの。
- 4 多くの人が競ってでも手に入れる価値があると認めるもの。
- 5 人々の評価と関係なくそれ自体として固有の価値を持つもの。

(C) —— 線部(3)について。このような結果が生じる過程の説明として、最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 「身内」意識を持つ集団が連帯意識を高めるために自分達に属するものを稀少資源と主張し、そうする中でその集団は他者に対して優越するという意識を強めるようになる。
- 2 ある集団が稀少資源を得るために「身内」意識を利用して他者との違いを強調し、そうする中で「身内」の連帯意識が他者に対する排他的な意識を強めることになる。
- 3 「身内」意識を持つ集団が他の集団と協力しなければ得られない稀少資源の獲得に努め、そうする中で互いに連帯意識を持ちつつ競争しようとする意識が強まることになる。
- 4 ある集団が稀少資源の獲得をめぐつて他の集団と競争し、そうする中で自らの集団を「身内」とし他の集団を他者とする区別が生まれ排除する意識が強まることになる。
- 5 「身内」意識を持つ集団に属する一部の人々が稀少資源を得るために「われわれ」と「彼ら」の区別を利用し、そうする中で集団内での敵対意識が強まることになる。

(D) 空欄 に入る言葉として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 理性的
- 2 互恵的
- 3 謙抑的
- 4 論理的
- 5 進歩的

(E) ——— 線部(4)と同じ意味を持つものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 反駁^{はげ}
- 2 反動
- 3 反芻^{すう}
- 4 反問
- 5 反撥^{はた}

(F) ——— 線部(5)について。そのような判定を下すことが容易ではないのはどのような場合か。本文に則して、句読点とも三十五字以上、四十五字以内で記せ。

(G) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 集団のあいだに何かしらの対立や紛争があるのは普通のことであり、些細な問題ささいに関わる小さな紛争であるかぎり、大規模で暴力的なものに発展することを心配する必要はない。

ロ 異なる集団のあいだに大規模な暴力的事態に発展しうる対立や紛争の火種となりうるものがあっても、そのために平和的で友好的な関係は成り立ち得ないとまでは言えない。

ハ 集団間の紛争は経済的な富をはじめとする資源の稀少性を原因として深刻化するため、その平等な配分方法を定めることが紛争の予防にとって重要である。

ニ 集団間の紛争がどのような状況で、何を原因として拡大するかについては様々な仮説を立てることができ、それらを総合する理論を打ち立てることは極めて困難である。

ホ 紛争が続いている中で対立している集団のいずれか一方が「寛容」で、他方が「不寛容」であると断定することは、その解決に繋^{つな}がらず、かえって悪化させることもある。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答题紙に書くこと)

小説家のウラジミール・ナボコフは、書物の「良い読者」であるためにはテキストの「細部に注意して、それを大事にしなくてはならない」と述べた。わたしは自分一人で本を読むときも、あるいは複数人の仲間たちと「読書会」をするときも、また大学で一〇人以上の学生を相手に読むときでも、その原則を大事にしよう心がけている。

でも、どうして「細部」にこだわる必要があるのだろうか。その理由は、眼のまえに置かれたテキストを「ただ読む」ということが、案外難しいことだからだ。書物を読んだときに、当然のことだが、わたしたちは最初から「わかる」ことをついつい目指してしまう。そう言ったとしても、テキストは本質的にわからないものだと主張したいのではない。むしろ、そうして「わかった」と思ったときに実際起きていることにカイギ的なだけだ。なにかを読んで「わかった」と感じるとき、その内実は自分がすでに知っていることを書物のうえに投影しているだけである場合が少なくないからである。

今年(二〇二四年)の春から、一年生向けの或る授業を大学で担当することになった。履修者の専攻はバラバラで、授業内容についても、学生たちに大学生としての基本的なスキルを学んでもらう以外は教員のサイリョウにゆだねられている。わたしはそれを幸いとして、その授業で短編小説をいくつか扱ってみることにした。たとえば、アーシュラル・グインの「オメラスから歩み去る人々」やヴァージニア・ウルフの「外から見た女子学寮」といった短編作品である。それらよく出来た短編を読むことで、ひとは普段とは異なる世界へと導かれたり、あるいは自分だけのものと密かに感じていたことが他の人とも共有できることに驚いたりもする。

授業内で短編小説を読むということだけでも、⁽¹⁾「哲学教師」として勤めている者にとつては「実験」であるが、もう一つ別の工夫も取りいれてみた。それは同じ短編を二週続けて読むという試みだ。二週間で一つの短編を読むということではない。二つの週で各週ともに学生には同じ短編、たとえば、先ほど言及した⁽²⁾「オメラスから歩

み去る人々」を教室のなかで読んでもらうのである。もちろん、事前に課題として学生に指示し、授業時間外で読むことを強いることも十分可能である。でも、そういう場合、結局読み飛ばすことになったり、場合によっては面倒だからと Google で検索して話の筋を確認して済ませてしまったりすることも多い。

この「オメラスから歩み去る人々」という物語は、タイトルが示しているように、オメラスという架空の街が舞台であり、そこで人々は幸福に暮らしているらしい。国王もいなければ、奴隷もない。社会の法律も驚くほど少ない。物語の語り手によれば、その街の住民は「高潔な野人」でもなければ、「退屈なユートピア人」でもなく、「私たち同様に複雑な人間」であるという。

だが、そういった幸せで包まれたような街に、一つの暗部が存在する。その街の地下には一つの部屋が用意されており、そこに一人の子供が幽閉されているというのだ。オメラスの街の美しさやその住民の幸福といったもののすべてが「この一人の子どものおぞましい不幸」に負っていると語られる。ただし、この子どもは無視されているのではないし、街の一部の人しか知らない秘密でもない。「オメラスの人びと」が全員知っている事実だという。

この物語には続きがある。その幽閉されている子どもを見た少年少女のなかには、その事実を知ったあとに家に戻らない者がいるという。彼女らは「オメラスを後にし、暗闇の中へと歩み」つづける。注記するまでもなく、そのことがタイトルの「オメラスから歩み去る人々」の理由にもなっている。

このような邦訳の文庫でもわずか一〇頁程度の物語を学生と一緒に読んでみる。すると最初の週は、この種の物語を読むことに慣れていない学生の場合は、「どう読んだら良いのかわからない」という感想になったり、あるいは子供が幽閉されること、少し難しく表現すれば社会で「スケープゴートが存在する」ことは「悪」であるとか、あるいはそれこそが「この世の現実だ」といった感想が出たりする。でも、もしこの物語を読んだあとで、子供が幽閉されていることや、その是非だけにこだわるのだとしたら、ナポコフが言ったように「^(注5)『ボヴァリー夫人』を読むにあたって、この小説はブルジョワ階級の告発である」という「先入観をもって読み始めるくらい、

退屈で、作者にたいしても不公平」なことなのである。道徳的な教訓を学びたいのなら、倫理の教科書でも読んでいた方が良いはずだ。

このように、その短編を読んだ一週目は、学生たちの何割かはこの物語をどう読んだら良いのかわからない状態であるか、「わかった」と思う学生の場合、右で記したような「既成の一般論」に物語を引きつけて読んでいかのどちらかになりがちである。でも、それだとおそらく読んだことにはならない。そこから「オメラスから歩み去る人々」を「再読」することが必要になる。その「再読」によって誰も聞いたことがないような斬新な読みが展開されるわけではないし、その種のことを求めているわけでもない。むしろ重要なのは、最初の週の時点では、単に自分が読みたいものをテキストの上に投影していた、あるいは投影できないからわからないと思い込んでいたことに気づくことなのである。

わたしは「自分が読みたいものを書物に読み込んでしまう」あり方を、「自己愛的な読み」と呼んでいる。読んで「わかった」と感じるものが、実は単に自分の鏡像を確認しているに過ぎないからだ。ゆえにロラン・バルトは「再読を軽んずる人は、至る所で、同じ物語を読まざるを得ない」とおそらく述べたのだと思う。一度目に読んでわかるといふ場合、それは単に自分と出会っているだけである。再読することで、はじめて自分の当初の意識の外にあったものに目を向けることができるようになる。そのためにも、最初に述べたように「細部」に注意を向けることが肝要となる。「細部」とは「自己愛的な読み」の視線を逃れるものである。そこに注意を払う訓練をすることで、テキストそれ自体と向き合うことがようやくできるようになるのだ。

そして、⁽⁴⁾だからこそ読書会にも意味がある。同じ文章を複数人で読み、気になったことを述べあう。すると、自ずから各人の読みが自身の理解の範疇ちゆうのなかで起きていたものにすぎないことを痛感することになる。いったいどうしてこんなことに気づかなかったのか、なぜその部分を読み飛ばしていたのか、等々。これはあくまでシケンだが、その際に「専門家」がいるかどうかは副次的な問題でしかない。複数の注意深い読者が同時にテキストを読むことで、自分が見落としていたところに気づくことのほうが重要だと思うからだ。バルトの言葉をもじ

れば、「読書会を軽んずる人は、至る所で、同じ物語を読まざるを得ない」と述べることもできるだろう。複数人との読書会は、各自の自己愛的な読みを切断して、意識の外にあった事実へとひとを直面させる。そこに学びがあり、また他では得られない快樂もある。

一番最初にナボコフの言葉を引いた。くりかえせば「良い読者」であるためにはテキストの「細部に注意して、それを大事にしなくてはならない」という助言である。

そのナボコフの言葉を知るきっかけとなったのは、彼の代表作の一つである『ロリータ』の「訳者あとがき」を読んだ時のことだった。その「訳者あとがき」を執筆している英米文学者のW先生は、ナボコフの『文学講義』から「人は書物を読むことはできない、ただ再読することができるだけだ」という文言も引用して、『ロリータ』を読み直すたびに「初めて気がつくような仕掛け」が見つかる」と記している。

W先生は、⁽⁵⁾テキストに書かれていることはひとまず全部真実であると受け止めるべきだとよく言う。そこではフィクションかフィクションではないのかという区別はいったん失効する。テキストの作り出す世界自体が、一つの現実であり、そのことに読者は忠実でなければならぬからだ。「思想」「意図」「象徴」、そういう言葉でテキストをテキスト外の何かへと結びつけようとするのは、書物にたいする不誠実な態度なのだと思いは知らされている。

(アダム・タカハシ「読書会のススメ」による)

(注) 1 ウラジーミル・ナボコフ——ロシアで生まれ、ヨーロッパとアメリカで活動した作家(一八九九—一九七七)。

2 アーシュラ・ル・グイン——アメリカのSFおよびファンタジー作家(一九一九—二〇一八)。

3 ヴァージニア・ウルフ——イギリスの作家、評論家(一八八二—一九四二)。

4 スケープゴート——不当な責任転嫁の犠牲となる個人や集団のこと。

5 『ボヴァリー夫人』——フランスの作家ギュスターヴ・フロベール(一八二二—一八八〇)の小説。

問

- (A) 〓 線部(イ・ロ・ハ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書かいしよで記すこと)
- (B) 〓 線部(1)について。筆者が「実験」として行っている行為として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
- 1 哲学の教師なのに、自然科学的な方法を取り入れた授業を行う。
 - 2 専攻がバラバラの学生たちが履修するので、教科書を決めないで授業を行う。
 - 3 通読に時間をかけ、二週間で一つの短編を読み終える授業を行う。
 - 4 専門家として読みなれている哲学書ではなく、文学作品を読む授業を行う。
 - 5 哲学研究ではなく、大学生にとって必要な基本的スキルを教える授業を行う。
- (C) 〓 線部(2)について。一週目での学生たちの反応として、筆者が述べているものを1、述べていないものを2として、それぞれ番号で答えよ。
- イ わずか一〇頁程度の文学作品をどのように理解しているのか分からずに困惑する。
- ロ ユートピアのようなオメラスの街に住む人々の幸福な生活に憧れる。
- ハ 全体の幸福のために子供が幽閉されていることの道徳的な是非にこだわる。
- ニ たった一人の犠牲によつて残りのすべての人が幸福になれる仕組みを称賛する。
- ホ オメラスの物語から、社会には犠牲が不可避だという一般論に引きつけて結論する。
- (D) 〓 線部(3)について。その理由として適当なものを1、適当でないものを2として、それぞれ番号で答えよ。
- イ あらすじを追うだけで、これまで誰も聞いたことがないような新しい解釈がなされていないから。
- ロ 文章をわかろうと思って読むとき、自分がすでに知っていることをそこに投影してしまうから。

ハ わかったと思ったときにも、自分では気づかない、読み落としていた細部が存在するものだから。
ニ 課題で読了を求められた小説を、インターネット上の要約を見て読んだことになってしまうから。
ホ 鏡に映った自分の姿を見るような読み方にとどまっただけで、ただ自分と出会っているだけから。

(E) 線部(4)について。筆者がこのように考える理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 専門家の知識に触れ、それを吸収することで理解をより深めることができる機会だから。
- 2 他者が自分を映し出す鏡の役割を果たしてくれるので、安心して読むことができるから。
- 3 各人が自分とは別の読み方に触れて、自分の読み方の優れた点を改めて確認できるから。
- 4 当初の自分の意識の外にあったものに触れて自己愛的な読みを脱することができるから。
- 5 他の参加者の読み方が聞けるので、自分で再読する手間を省くことができるから。

(F) 線部(5)について。ここで述べられているような態度を受け入れた場合の読み方として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 架空の作中人物、たとえばシャーロック・ホームズの下宿の描写を歴史的事実と比較する。
- 2 物語のなかの出来事が、自然法則等に照らして現実でありうるものかを考える。
- 3 物語の本文に書かれている世界を疑わず、それ自体で完結した現実として受け入れる。
- 4 物語の細部が明示的に描写されていないときは、文献を調査し、知識によって補う。
- 5 物語の理解を容易にするために、作者の隠された意図や思想などを推測する。

三 左の文章は江戸時代の歌論書『八雲のしをり』の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

「嵐もしろき春の曙」夕日をあらふ沖つしら波「うつるもくもる朧月夜に」などいふ類の秀句はとるまじきよしなり。これはたことわりなきにあらず。かかる詞はその上の眼目なれば、⁽¹⁾それをとる時は、その意を盗むになるなり。かかれば制の詞^(注1)とて止められたるは、⁽²⁾いみじきことになむ。

「ほのぼのと」見わたせば」などいふ詞の類は、初句におくまじきよしなり。そは「ほのぼのと」見わたせば」など打出でたらむに、^(注2)柿本の大夫・素性ひじりなどにまさりたらむはいみじからめど、おとりたらむは、⁽³⁾もぞこなひなるべければ、⁽⁴⁾よむまじとにはあらねど、はれの時には心すべきなり。

四十にならぬ人は老といふことをばよむべからずと、昔よりいひふるしためり。それ題を設けてよむ歌は、もと虚言なれば若きもの老といはむ、何か苦しからむ。ことに恋の歌には、男の女になり、女の男になりてよむ事常の事なり。また恋歌ならでも、貴人の土民になり、土民の貴人になり、法師の漁人になり、尼の狩師になりなど、その例挙げてかぞへがたし。また万葉には、^(注3)琴にもなり、蟹・鹿等にもなり、^(注4)古今には、牽牛・織女にもなりて詠める歌もあり。かかれば若きも老となり、老も若きになりなど、互ひに通はしまむ、⁽⁵⁾なでふことかあらむ。

恋の歌に待つといふは女なり。通ふ心によむは男なり。古への夫婦のさま、女は親の方にあるを、男の方より通へるなり。⁽⁶⁾たまたま女を男の方に迎へとれるもあれど、それも別所に置いて、なほ男の方より通ひしなり。今も貴人は、別所に北の方をすませて、男君の方より通ひたまふなり。これ古への風のなごりなるべし。

人に物を贈るに、今は他よりもらひしよしにいひなすなり。そはその物のすぐれなき、あるはその物のあしきなどを恥ぢてするわざにて、⁽⁷⁾人に罪おはするはらぐるなりけり。古への人は、その物あしくその物すくなくとも、自らてづから辛苦して求め出でたるよしにいひしなり。古今に、^(注5)仁和のみかど人に若菜たまひける時の御歌⁽⁸⁾

(9) 君がため春の野に出でて若菜つむ我衣手に雪は降りつとみゆるにて心得べし。

地名を名所と心得たる人あり。地名はたとひ古事記・日本紀等に見えたりとも、名所とはいふべからず。古へより歌にもよみ、花・紅葉・月・雪等につきて、聞え高き所をこそ名所とはいふべけれ。されば題詠には名所の外はよむべからず。实景には名所もただのもくるしからず。

(注) 1 制の詞——歌学で禁止された詠歌上の表現。

2 柿本の大夫・素性ひじり——柿本人麻呂と素性法師。それぞれ「ほのぼのと」「見わたせば」から始まる名歌を詠んだ歌人としても有名であった。

3 万葉——『万葉集』。

4 古今——『古今和歌集』。

5 仁和のみかど——光孝天皇。

6 日本紀——『日本書紀』。

問

(A) ——線部(1)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 序詞を用いた秀逸な和歌の組み立て
- 2 上の句を構成する主要な約束事
- 3 高貴な人にだけ許された視点の置き方
- 4 昔の名歌のもつとも肝心な部分
- 5 上級者向けの複雑な和歌の詠み方

(B) ——— 線部(2)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 とても巧みな詠み方であった。
- 2 きわめて良い判断であった。
- 3 ひどく愚かなふるまいであった。
- 4 たいそうみつともない作品であった。
- 5 非常に分不相応なことであった。

(C) ——— 線部(3)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 興ざめ
- 2 心残り
- 3 無神経
- 4 損失
- 5 幼稚

(D) ——— 線部(4)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 決して詠んではいけないというのはもちろんとして
- 2 そもそも詠んでよいといった状況ではないのに
- 3 まさか詠むというようなことはないであろうが
- 4 努力すれば詠めないということではないものの
- 5 絶対に詠んではいけないということではないけれど

(E) ——— 線部の文法的説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 「いひふるし」は動詞、「た」は完了・存続の助動詞、「めり」は推定の助動詞。
- 2 「いひふるし」は動詞、「た」は断定の助動詞、「めり」は推定の助動詞。

- 3 「いひ」は名詞、「ふるし」は形容詞、「た」は完了・存続の助動詞、「めり」は推量の助動詞。
4 「いひふる」は動詞、「し」は過去の助動詞、「ため」は動詞、「り」は完了・存続の助動詞。
5 「いひふる」は動詞、「し」は動詞、「た」は断定の助動詞、「めり」は推量の助動詞。
- (F) 線部(5)について。なぜそう言えるのか。その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 恋愛はどのような間柄でも可能だから。
- 2 奇をてらうより先に身に付けるものがあるから。
- 3 何があっても年齢が入れ替わることはあり得ないから。
- 4 古来人間ではない物に仮託した歌すらあるから。
- 5 老人を冒流することだけは許されないから。

- (G) 線部(6)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
- 1 もしかしたら
 - 2 偶然
 - 3 まれに
 - 4 ある時には
 - 5 かえって

- (H) 線部(7)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
- 1 他人に粗悪品を押し付けようとする悪たくみ
 - 2 他人に責任を押し付けようとする性根の悪さ
 - 3 他人に仏教の戒律を破らせるがしこさ
 - 4 他人がお持ちになっっている意地汚い心

5 他人が最後まで責任をお取りになるべき失敗作

(I) ——— 線部(8)の現代語訳を七字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(J) ——— 線部(9)の和歌は本文の中でどのような役割を果たしているか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 かつて高貴な人物が贈り物をする際に、家臣に入手させた物であっても自分で入手したことにしていたことを示す例になっている。

2 かつて贈り物に和歌を添える際、敢えて低い身分を装って詠むことで大した物ではないと謙遜する風習があつたことの例になっている。

3 かつては贈り物をする際に、相手のためにできるだけ良い物を選んだことを詠む和歌が添えられていたことを伝える例になっている。

4 昔の人が贈り物をする際に、ささやかな物であっても自ら苦労して手に入れた品であることを相手にことさら示していた例になっている。

5 昔の人が秀でた恋の歌を詠むためには、贈り物を入手した自らの成果を誇張しなければならなかつたことが分かる例になっている。

(K) ——— 線部(10)について。筆者はどのような場所を「名所」としているか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 古くから書物の中に記されてきた有名な場所

2 昔から歌に詠まれてきた有名な場所がある場所

3 四季を象徴する典型的な景物が複数ある有名な場所

4 かつては有名な景物があつたことで知られる場所

5 歌の題として設定されるべき有名な場所

- (L) ——— 線部(1)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
- 1 実際の風景としては歌に詠むべきである名所もそれ以外も大して変わらないのだよ。
 - 2 実際の風景には花や紅葉などが無かったとしても名所を詠む際には気にしなくてよい。
 - 3 実際に風景を見て詠んだ歌は行ったこともない名所をただ詠むより感動的になるものだ。
 - 4 実際の風景を目にしたならば名所であろうがなかろうが詠むのが風流というものだ。
 - 5 実際の風景であれば名所であっても普通の場合であっても問題なく詠んでよい。
- (M) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。
- イ 公の場で歌を詠む際には、特に慎重な語句選択の判断が求められる。
 - ロ 古くから身分や立場を超えた恋愛が多く詠まれてきた。
 - ハ 今でも一部の人は別居した上で通い婚をしている。
 - ニ 贈り物をするときには、他人からもらった品であるかのように詠んだ和歌を添えるべきだ。
 - ホ 『古事記』や『日本書紀』に出てくる地名には名所は存在しない。